

食魔

岡本かの子

青空文庫

菊^{きく}蒿^{こう}苳^{そう}と和名はついでいるが、原名のアンデューヴと呼ぶ方が食通の間には通りがよいようである。その蔬菜^{そくさい}が姉娘のお千代の手で水洗いされ、笹^{ささ}で水を切つて部屋のまん中の台^だ俎^な板^{ばん}の上に置かれた。

素人の家にしては道具万端整つている料理部屋である。ただ少し手狭なようだ。

若い料理教師の鼈^{べつ}四^し郎^{ろう}は椅子^{いす}に踏み反り返り煙草^{たばこ}の手を止めて戸外の物音を聞き澄ましている。外では初冬の風が町の雑音を吹き靡^{なび}けている。それは都会の木枯しとでもいえ、そんな賑^{にぎや}かだ寂しい音だ。

妹娘のお絹はこどものように、姉のあとについて一々、姉のすることを覗^{のぞ}いて来たが、今は台俎板の傍に立つて笹の中の蔬菜を見入る。蔬菜は小柄で、ちようど白菜を中指の丈^さけあまりに縮めた形である。しかし胴^{ふと}の肥^{ふと}り方の可憐^{かれん}で、貴重品の感じがするところは、譬^{たと}えば露^{つゆ}の臺^{とう}といったような、草の芽株に属するたちの品かともおもえる。

笹の目から溜^{した}つた蔬菜の雫^{しずく}が、まだ新しい台俎板の面に濡^{ぬれ}木の肌^{ひら}の地図^{ちず}を浸^{ひそ}み拵^{ひろ}げて行く勢^{いき}いも鈍^くつて来た。その間に、棚^{ひきだ}や、戸棚^{ひきだ}や抽出^{ひきだ}しから、調理に使いそうな道具と、薬^や味^{あじ}容^{よう}れを、おずおず運び出しては台俎板の上に並べていたお千代は、並び終えても動かな

い料理教師の姿に少し不安になった。自分よりは教師に容易く口の利ける妹に、用意万端整ったことを教師に告げよと、目まぜをする。妹は知らん顔をしている。

若い料理教師は、煙草の喫い殻を屑籠の中に投げ込み立上つて来た。じろりと台組板の上を見互す。これはいらんという道具を二三品、抽き出して台組板の向う側へ黙つて抛り出した。

それから、箆の蔬菜を白磁の鉢の中に移した。わざと肩肘を張るのではないかと思えるほどの横柄な所作は、また荒つぽく無雑作に見えた。教師は左の手で一つの匙を、鉢の蔬菜の上へ控えた。塩と胡椒と辛子を入れる。酢を入れる。そうしてから右の手で取上げたフォークの尖で匙の酢を掻き混ぜる段になると、急に神経質な様子を見せた。狭い匙の中でフォークの尖はミシン機械のように動く。それは卑劣と思えるほど小器用で脇の下がこそばゆくなる。酢の面に縮緬皺のようなさざなみか果てしもなく立つ。

妹娘のお絹は彼の矛盾にくすりと笑った。鼈四郎は手の働きは止めず眼だけ横眼にじろりと睨んだ。

姉娘の方が肝が冷えた。

匙の酢は鉢の蔬菜の上へ万遍なく撒き注がれた。

若い料理教師は、再び鉢の上へ銀の匙を横へ、今度はオレフ油を鑷びんから注いだ。

「酢の一に對して、油は三の割合」

厳かな宣告のようにこういい放ち、匙で三杯、オレフ油を蔬菜の上に撒き注ぐときには、教師は再び横柄で、無雜作で、冷淡な態度を採上げていた。

およそ和あえものの和え方は、女の化粧と同じで、できるだけ生地きじの新鮮味を損そこなわないようにしなければならぬ。掻き交ぜ過ぎた和えものはお白粉しろいを塗りたくった顔と同じで氣韻きいんは生動しない。

「揚ものの衣の粉の掻き交ぜ方だつて同じことだ」

こんな意味のことを喋しゃべつた鼈四郎は、自分のいったことを立証するように、鉢の中の蔬菜を大ざっぱに掻き交ぜた。それでいて蔬菜が底の方からむらなく攪かくらん乱されるさまはやはり手馴てなれの技ぎりよう倆ららしかつた。

アンディーヴの戻莖の群れは白磁の鉢の中に在つて油の照りが行互り、硝子越ガラスごしの日ざしを鋭く撥はね上げた。

蔬菜の浅黄いろを眼に染しませるように香辛入りの酢にが匂におう。それは初冬ながら、もはや早春が訪れでもしたような爽さわやかさであつた。

鼈四郎は今度は匙をナイフに換えて、蔬菜の群れを鉢の中のまま、ざつと截り捌いた。程のよろしき部分の截片を覗つてフォークでぐざと刺し取り、

「食つて見給え」

と姉娘の前へ突き出した。その態度は物の味の試しを勧めるというより芝居でしれ者が脅しに突出す白刃に似ていた。

お千代はおどおどしてしまつて胸をあとへ引き、妹へ譲り加減に妹の方へ顔をそ向けた。「おや。——じゃ。さあ」

鼈四郎はフォークを妹娘の胸さきへ移した。

お絹は滑らかな頸の奥で、喉頭をこくりと動かした。煙るような長い睫の間から瞳を凝らしてフォークに眼を遣り、瞳の焦点が截片に中ると同時に、小丸い指尖を出してアンディーヴを撮み取った。お絹の小隆い鼻の、種子の形をした鼻の穴が食欲で拡がった。

アンディーヴの截片はお絹の口の中で慎重に噛み砕かれた。青酸い滋味が漿液となり嚙下される刹那に、あなやと心をうつろにするうまさがお絹の胸をときめかした。物憎いことには、あとの口腔に淡い苦味が二日月の影のようにほのかにとどまったことだ。この淡い苦味は、またさつき喰べた昼食の肉の味のしつこい記憶を軽く拭き消して、

親しみ返せる想い^{おも}に出にした。アンディーヴの截片はこの効果を起すと共に、それ自身、食べて食べた負担を感じしめないほど軟く口の中で尽きた。滓^{かす}というほどのものも残らない。

「口惜しいけれど、おいしいわよ」

お絹は唾液^{だえき}がにじんだ唇^{くちびる}の角を手の甲でちよつと押えてこういった。

「うまかろう。だから食ものは食つてから、文句をいいなさいというのだ」

鱈四郎の小さい眼が得意そうに輝いた。

「ふだん人に難癖をつける娘も、僕の作った食ものうまさには一言も無いぜ。どうだ参つたか」

鱈四郎は追い討ちしていい放つた。

お絹は両^{りょうそで}袖を胸へ抱え上げてくるりと若い料理教師に背を向けながら、

「参つたことにしとくわ」

と笑い声で応じた。

ふだん言葉かたき同志の若い料理教師と、妹との間に、これ以上のうるさい口争いもなく、さればとって因縁を深めるような意地の張り合いもなく、あっさり済んでしまったのを見て、お千代はほつとした。安心するとこの姉にも試しに食べてみたい気持がこみ上

げて来た。

「じゃ、あたしも一つ食べてみようかしら」

とよそ事のようにいいながらそつと指尖を鉢に送って小さい截片を一つ撮み取って食べる。

「あら、ほんとおいしいのね」

眼を空にして、割烹衣の端で口を拭ぬぐつているときお千代は少し顔を赭あからめた。お絹は姉の肩越しに、アンディーヴの鉢を覗き込んだが、

「鼈四郎さん、それ取つといてね、晩のご飯のとき食べるわ」

そういった。

巻煙草まきたばこを取出していた鼈四郎べつしろうはこれを聞くと、煙草を口に銜くわえたまま鉢を掴つかみ上げ臂ひしを伸くすばして屑箱くずばこの中へあけてしまった。

「あらッ！」

「料理だつて音楽的のものさ、同じうまみがそう晩までも続くものか、刹那せつなに充実し刹那に消える。そこに料理は最高の芸術だといえる性質があるのだ」

お絹は屑箱の中からまだ覗のぞいているアンディーヴの早春の色を見遣みやりながら

「鼈四郎の意地悪る」

と口惜しそうにいった。「おとうさまにいつつけてやるから」と若い料理教師を睨んだ。お千代も黙つてはいられない気がして妹の肩へ手を置いて、お交際に睨んだ。

令嬢たちの四つの瞳を受けて、鼈四郎はさすがに眩しらしく小さい眼をしばたいたいて伏せた。態度はいよいよ傲慢に、肩肘張つて口の煙草にマッチで火をつけてから

「そんなに食つてみたいのなら、晩に自分たちで作つて食いなさい。それも今のものそつくりの模倣じやいかんよ。何か自分の工風を加えて、——料理だつて独創が肝心だ」

まだ中に蔬菜が残つている紙袋をお絹の前の台俎板へ抛り出した。

これといつて学歴も無い素人出の料理教師が、なにかにつけて理窟を捏ね芸術家振りたがるのは片腹痛い。だがこの青年が身も魂も食ものに殉じていることは確だ。若い身空で女の襷をして漬物樽の糠加減を弄つている姿などは頼まれてもできる芸ではない。生れ付き飛び離れた食辛棒なのだろうか、それとも意趣があつて懸命にこの本能に縋り通して行こうとしているのか。

お絹のところに鼈四郎がいい捨てた言葉の切れ端が蘇つて来る。「世は遷り人は代るが、人間の食意地は変らない」「食ものぐらい正直なものはない、うまいかまずいかすぐ判る」

「うまさということとは神秘だ」——それは人間の他の本能とその対象物との間の魅力に就てもいえることなのだが、鼈四郎がいうとき特にこの一味だけがそれであるように受取らせる。ひよつとしたらこの青年は性情の片端者なのではあるまいか、他の性情や感覚や才能まで、その芽を挽ぎ取られ、いのちは止むなく食味の一方に育ち上った。鼈四郎が料理をしてみせるとき味利きということをしたことが無い。身体全体が舌の代表となっていて、料理の所作の順序、運び、拍子、そんなもののカンから味の調不調の結果がひとりで見分けられるらしい。食欲だけ取立てられて人類の文化に寄与すべく運命付けられた畸形な天才。天才は大概片端者だという。そういえばこの端麗な食青年にも愚かしいものを持つ美しさがあつて、それが素焼の壺とも造花とも感じさせる。情慾が食気にだけ偏つてしまつて普通の人情に及ぼさないためかしらん。

一ばん口数を利く妹娘のお絹がこんな考えに耽つてしまつてみると、もはや三人の間には形の上の繋りがなく、鼈四郎はしきりに煙草の煙を吹き上げては椅子に踏み反つて行くだけ、姉娘のお千代は、居竦まされる辛さに堪えないというふうにごそこそ料理道具の後片付けをしている。一しきり風が窓硝子に砂ほこりを吹き当てる音が極立つ。

「天才にしても」とお絹はひとり言のようにいった。

「男の癖にお料理がうまいなんて、ずいぶん下卑た天才だわよ」

と鼈四郎の顔を見ていった。

それから溜つたものを吐き出すように、続けさまに笑った。

鼈四郎はむつとしてお絹の方を見たが、こみ上げるものを飲み込んでしまったらしい。

「さあ、帰るかな」

としよんぼり立上ると、ストーヴの角に置いた帽子を取ると送りに立った姉娘に向い

「きょうは、おとうさんに会ってかないからよろしくって、いっといて呉れ給え」

と行って御用聞きの入出口から出て行った。

靴の裏と大地の堅さとの間に、さりさり砂ほこりが感じられる初冬の町を歩いて鼈四郎は自宅へ帰りかかった。姉妹の娘に料理を教えに行く荒木家蛍雪館のある芝の愛宕台と自宅のある京橋区の中橋広小路との間に相当の距離はあるのだが、彼は最寄の電車筋へも出ずゆっくり歩いて行った。

一つは電車賃さえ節約の身の上だが、急いで用も無い身体である。もう一つの理由はト

ンネル横町と呼ばれる変つた巷路こうろを通り度たいたためでもある。

いずれは明治初期の早急な洋物輸入熱の名残りであろう。街の小道の上に煉瓦れんが積みのトンネルが幅広く架け渡され、その上は二階家のようにして住んでいるらしい。瓦屋根かわらやねの下の壁に切つてある横窓からはこどもの着ものなど、竹竿で干し出されているのをときどき見受ける。

鼠ねずみいろ色の瓦屋根も、黄土色の壁も、トンネルの紅色の煉瓦も、燻いぶされまた晒さらされて、すつかり原色を失い、これを舌の風味にしたなら裸麦で作つた黒パンの感じだと鼈四郎はいつも思う。そしてこの性を抜いた豪華の空骸なきがらに向け、左右から両側になつて取り付いている二階建の小さい長屋は、そのくすんだねばねばした感じから、鶉つくみわたの腸の塩辛のようにも思う。鼈四郎はわたりの風趣を強いて食味に翻訳して味わうのではないが、ここへ彼は来ると、裸麦の匂においや、鶉の腸にまで染しみている木の実の匂いがひとりでにした。佐久間町の太銀杏おおいちようが長屋を掠かすめて箒ほうきのように見える。

彼はこの横町に入り、トンネルを抜け横町が尽きて、やや広い通りに折れ曲るまでの間は自分の数奇の生立ちや、燃え盛る野心や、ままならぬ浮世うきよや、癩しやくに触る現在の境遇をしばし忘れて、鬚鬚あいたいとした気持になれた。それはこの上墜おちようもない世の底に身を置く

泰^{やす}らかさと現実離れのした高貴性に魂を提げられる思いとが一つに中和していた。これを侘^わびとでもいうのかしらんと鼈四郎は考える。この巷路を通り抜ける間は、姿形に現れるほども彼は自分が素直な人間になつてゐるのを意識するのであつた。ならば振り戻つて、もう一度トンネルを潜^{くぐ}ることによつて、鬚鬚とした意識に浸り還^{かえ}せるかという、そうはゆかなかつた。感銘は一度限りであつた。引き返してトンネル横町を徘徊^{はいかい}してもただ汚らしく和洋蕪雜^{わようぶざつ}に混つてゐる擬^{まが}いものの感じのする街に過ぎなかつた。それゆえ彼は、螢雪館へ教えに通う往き来のどちらかにだけ日に一度通り過ぎた。

土橋を渡つて、西仲通りに歩るきかかるとちらほら町には灯が入つて来た。鼈四郎はそこから中橋広小路の自宅までの僅^{わずか}な道程を不自然な曲り方をして歩るいた。表通りへ出てみたりまた横町へ折れ戻り、そして露路の中へ切れ込んだりした。彼が覗^{のぞ}き込む要所要所には必ず大小の食もの屋の店先があつた。彼はそれ等の店先を通りかかりながら、店々が今宵^{こよひ}、どんな品を特品に用意して客を牽^ひき付けようとしてゐるかを、じろりと見検めるのだつた。

ある店では、紋のついた油障子の蔭から、赤い蟹^{かに}や大粒^{はまぐり}の蛤^{はまぐり}を表に見せていた。ある店では、シヨウウインドーの中に、焼串^{やきぐし}に鴨^{しぎ}を刺して赤蕪^{あかかぶ}や和蘭芹^{オランダゼリ}と一しよに皿に並

べてあつた。

「どこも、ここも、相変らず月並なもののばかり仕込んでやがる。智慧ちえのない奴等ばかりだ」
鼈四郎は、こう呟つぶやくと、齒痒はがゆいような、また得意の色があつた。そしてもし自分ならば、
——と胸で、季節の食品月令から意表で恰かつこう好の品々を物色してみるのだった。

彼の姿を見かけると、食もの屋の家の中から声がかけられるのであつた。

「やあ、先生寄つてらっしゃい」

けれども、その挨拶あいさつ振りには義理か、通り一遍のものだった。どの店の人間も彼の当身あてみの多い講釈には参らされていた。

「寄つてらっしゃいたつて、僕が食うようなものはありやしまじやないか」

「そりやどうせ、しがない垂簾のれんの食もの屋ですからねえ」

こんな応対で通り過ぎてしまう店先が多かつた。無学を見透されまいと、嵩かさにかかつて人に立向う癖が彼についてしまつている。それはやがて敬遠される基と彼は知りながら自分でどうしようもなかつた。彼は寂しく自宅へ近付いて行つた。

表通りの呉服屋と畳表問屋の間の狭い露路の溝板へ足を踏みかけると、幽かな音で溝板の上に弾ねているこまかいものの気配いがする。暗くなつた夜空を振り仰ぐと古帽子の鏝を外ずれてまたこまかいものが冷たく顔を撫る。「もう霰が降るのか。」彼は一瞬の間に、伯母から令押被の平凡な妻と小児を抱えて貧しく暮している現在の境遇の行体が胸に泛び上つた。いま二足三足の足の運びで、それを眼のあたりに見なければならぬ運命を思うと鼈四郎は、うんざりするより憤怒の情が胸にこみ上げて来た。ふと螢雪館の妹娘のお絹の姿が佛に浮ぶ。いつも軽蔑した顔をして冷淡につけつけものをいい、それでいて自分に肌目のこまかい、しなやかで寂しくも調子の高い、文字では書けない若い詩を夢見させて呉れる不思議な存在なのだ。

「なんだって、自分はあるに好きなお絹と一しよになり、好きな生活のできる富裕な邸宅に住めないのだろう。人間に好くという慾を植えつけて置きながら、その慾の欲しがるものを真つ直には与えない。誰だか知らないが、世界を慥えた奴はいやな奴だ」

その憤懣を抱いて敷居を跨ぐのだったから、家へ上つて行くときの声は抉るような意地悪さを帯びていた。

「おい。ビール、取つといたか。忘れやしまいな」

こどもに向き合い、五燭しよくの電灯の下で、こどもに一箸ひとはし、自分が二箸というふうにして夕飯をしたためていた妻の逸子は、自分の口の中のものを見悟られまいとするように周章あわてて嘔のみ下した。口を袖そでで押えて駆け出して来た。

「お帰りなさいまし。篤がお腹が減ったつてあんまり泣くものですから、ご飯を食べさせていましたので、つい気がつきませんでした、済みません」

いいつつ奥歯ほおと頬ほおの間に挟った嘔のみ残しのものを、口の奥で仕末している。

「ビールを取つといたかと訊きくんだ」

「はいはい」

逸子は、握り箸の篤を、そのまま斜に背中へ抛ほうり上げて負おふうと、霰の溝板を下駄で踏み鳴らして東仲通りの酒屋までビールを誂あつちえに行つた。

もう一突きで、カツとなるか涙をぼろつと滴すかの悲惨な界の気持にまで追い込められた硬直の表情で、鼈四郎はチャブ台の前に胡坐あぐらをかいた。チャブ台の上は少しばかりの皿小鉢が散らされ抛り置かれた飯茶碗めしぢゃわんから飯は傾いてこぼれている。五燭の灯の下にぼんやり照し出される憐あわれな狼藉ろうぜきの有様は、何か動物が生命を繋つなぐことのために僅わずかなものを必死と食い貪むさぼる途中を闖入者ちんにゆうしやのために追い退けられた跡とも見える。

「浅間しい」

鼈四郎は吐くようにこういつて腕組みをした。

この市隠荘はお絹等姉妹の父で漢学者の荒木螢雪が、中橋の表通りに画帖や拓本を売る螢雪館の店を開いていた時分に、店の家が狭いところから、斜向うのこの露路内に売家が出たのを幸、買取つて手入れをし寝泊りしたものである。ちよつとした庭もあり、十二畳の本座敷などは唐木が使つてある床の間があつて瀟洒しょうしゃとしてゐる。螢雪はその後、漢和の辞典など作つたものが当り、利殖の才もあつてだんだん富裕になつた。表通りの店は人に譲り邸宅を芝の愛宕山の見晴しの台に普請し、螢雪館の名もその方へ持つて行つた。

露路内の市隠荘はしばらく戸を閉めたままであつたのを、鼈四郎が螢雪に取り入り、荒木家の抱えのようになつたので、螢雪は鼈四郎にこの市隠荘を月々僅な生活費を添えて貸与えた。但し条件附であつた。掃除をよくすること、本座敷は滅多に使わぬこと——。それゆゑ、鼈四郎夫妻は次の間の六畳を常の住いに宛あててゐるのであつた。一昨年の秋、夫妻にこどもが生れると螢雪は家が汚れるといつて嫌な顔をした。

「ちつとばかりの宛がい扶持ぶちで、勝手な熱を吹く。いずれ一泡吹かしてやらなきや」

それかといつて、急にさしたる工夫もない。そんなことを考えるほど眼の前をみじめな

ものを感じさすだけだった。

鼈四郎は舌打ちして、またもとのチャブ台へ首を振り向けた。懐手をして掌を宛てている胃拡張の胃が、鳩尾みぞおちのあたりでぐうぐうと鳴った。

「うちの奴等、何を食ってやがったんだろう」

浅い皿の上から甘藷いもの煮ころばしが飯粒をつけて転げ出している。

「なんだ、いもを食ってやがる。貧弱な奴等だ」

鼈四郎は、軽蔑し切った顔をしたけれども、ふだん家族のものには廉価なものしか食べることを許さぬ彼は、家族が自分の掟おきて通りにしていることに、いくらか気を取直したらしい。

「ふ、ふ、ふ、いもをどんな煮方をして食ってやがるだろう。一つ試ためしてみてやれ」

彼は甘藷についてる飯粒を振り払い、ぱくんと開いた口の中へ抛り込んだ。それは案外上手に煮えていた。

「こりや、うまいや、ばかにしとらい」

鼈四郎は、何ともいいようのない擦くすくったような顔をした。

霰あられを前髪のうしろに溜めて逸子が帰って来た。こどもを支えない方の手で提げて来たビ

ール壘びんを二本差出した。

「さし当ってこれだけ持つて参りました。あとは小僧さんが届けて呉れるそうでございますわ」

鼈四郎はつねづね妻にいい含めて置いた。一本のビールを飲もうとするときにはあとに三本の用意をせよ。かかる用意あつてはじめて、自分は無制限と豪快の気持で、その一本を飲み干すことができる。一本を飲もうとするときに一本こつきりでは、その限数が気になり伸々した気持でその一本すら分量の価ね打ちだけに飲み足らうことができな。結局損な飲ませ方なのだ。罎びんづめ詰のビールなぞというものは腐るものではないから余計と置いて差支えない。よろしく気持の上の後詰の分として余分の本数をとって置くべきである。いま、逸子が酒屋へのビール注文の仕方は、鼈四郎のふだんのいい含めの旨かなに叶かなうものであつた。

「よしよし」と鼈四郎はいった。

彼は妻に、本座敷へ彼の夕食の席を設ることを命じた。これは珍しいことだつた。妻は「もし、ひよつとして汚しちや、悪かございません？」と一応念を押してみたが、良人おつとは眉まゆをぴくりと動かしただけで返事をしなかつた。この上機嫌を損じてはと、逸子は子供を

紐ひもで負おい替え本座敷の支度にかかった。

畳の上には汚れ除よけの渋紙が敷き詰めてある、屏風びょうぶや長押ながしの額、床の置ものにも塵ち除りよけの布ぬぶくろが冠かぶせてある。まるで座敷の中の調度が、住む自分等を異人種に取扱い、見られるのも触れられるのも冒流ぼうりゅうとして、極力、防避を申合せてるようであつた。こうしてから自分等に家を貸し与えた持主の螢雪の非人情をまざまざ見せつけられるようで、逸子には憎々しかつた。

彼女は復讐ふくしゅうの小気味よさを感じながらこれ等の覆いものを悉く剥ぎ取つた。子供の眼鼻ちりに塵ちりの入らぬよう手拭てぬぐいを冠かぶせといて座敷の中をざつと叩たたいたり掃はいたりした。何かしら今夜の良人おととの気分を察するところがあつて、電灯も五十燭しよくの球につけ替えた。明煌あかりうこ々と照り輝く座敷の中に立ち、あたりを見廻みまわすと、逸子も久振りに気も晴々となつた。しかし臆おくし心の逸子はやはり家の持主に対して内証の隠事をしてゐる気持が出て来て、永くは見廻みまわしていられた。彼女は座布団ざぶたんを置き、傍にビール罎びんを置くと次の茶の間に引下りそこで中断された母子の夕飯を食べ続けた。

この間台所で賑にぎやかな物音を立て何か支度をしてゐた鼈べつしろう四郎は、襖ふすまを開けて陶器鍋とうきなべのかかつた焜こんろ炉ろを持ち出した。白いものの山型に盛られている壺つばと、茶色の塊が入つてい

る鉢と白いものの横っている皿と香のものと配置よろしき塗膳ぬりぜんを持出した。醬油しょうゆ注ぎ、手塩皿、ちりれんげ、なぞの載っている盆を持出した。四度目にビールの栓せんぬ抜きとコップを、ちようど土が座敷に入るとき片手で提げような形式張った肘ひじの張り方で持出すと、洋服の腰に巻いていた妙な覆い布を剥ぎ去つて台所へ抛り込んだ。襖を閉め切ると、座敷を歩み過し椽側えんがわのところまで来て硝子障子ガラスしようじを明け放した。闇の庭は電燭の光りに、小さな築山や池のおも影を薄肉彫刻のように浮出させ、その表を僅な霰わづかあられが縦に掠めて落ちてゐる。幸に風が無いので、寒だけ室内の焔炉の火も、火鉢の火も穏かだった。

彼は座布団の上に胡座あくらを搔くと、ビール罎かに手をかけ、にこにこしながら壁越しに向つていった。

「おい、頼むから今夜は子供を泣かしなさんな」

彼は、ビールの最初のコップに口をつけこくこくと飲み干した。掌で唇の泡を拭ぬぐひ払うと、さも甘そうにうえーと暖氣おくびを吐いた。その誇張した味い方は落語家の所作を真似まねてして遊んでゐるようにも妻の逸子には壁越しに取れた。

彼は次に、焔炉にかけた陶器鍋の蓋ふたに手をかけ、やあつと掛声してその蓋を高く擡もたげた。大根の茹ゆつた匂においが、汁の煮出しの匂いと共に湯氣を上げた。

「細工はりゆうりゆう、手並をごろうじろ」

と彼は抑揚をつけていったが、蓋の熱さに堪えなかったものと見え、ち、ちちちといって、蓋を急ぎ下に置いた様子も、逸子には壁越しに察せられた。

じかに置いたらしい蓋の雫で、畳が損ぜられやしないか？ ひやりとした懸念を押しつけて、逸子におかしさがこみ上げた。彼女はくすりと笑った。世間からは傲慢一方の人間に、また自分たち家族に対しては暴君の良人が、食物に係っているときだけ、温順しく無邪気で子供のものである。何となくいじらしい気持が湧くの泣かきぬよう添寝をして寝かしつけている子供の上に被けた。彼女は子供のちゃんちゃんこと着もの間に手をさし入れて子供を引寄せた。寝つきかかっている子供の身体は性なく軟かに、ほっこり温かだった。

本座敷で鼈四郎は、大根料理を肴にビールを飲み進んで行った。材料は、厨で僅に見出した、しかも平凡な練馬大根一本に過ぎないのだが、彼はこれを一汁三菜の膳組に従って調理し、品附した。すなわち鱸には大根を卸しにし、煮物には大根を輪切にしたものを鰹節で煮てこれに宛てた。焼物皿には大根を小魚の形に刻んで載せてあった。鍋は汁の代りになる。

かくて一汁三菜の猷立は彼に於て完まうしたつもりである。

彼には何か意固いこじ地なものがあつた。富贍ふせんな食品にぶつかったときはひと種いろで満足するが、貧寒な品にぶつかったときは形式美を欲した。彼は明治初期に文明開化の評論家であり、後に九代目団十郎のための劇作家となつた桜痴居士福地源一郎の生活態度を聞知つていた。この旗本出で江戸っ子の作者は、極貧の中に在つて客に食事を供するときには家の粗末な惣菜そうざいのものにしろ、これを必ず一汁三菜の膳組の様式に盛り整えた。従つて焼物には塩し鮭おしやけの切身なぞもしばしば使われたという。

彼は料理に關係する実話や逸話を、諸方の料理人に、例の高飛車な教え方をする間に、聞出して、いくつとなく耳学問に貯える。何かという場合にはその知識に加担を頼んで工夫し出した。彼は独創よりもどつちかという記憶のよい人間だった。

彼は形式通り膳組されている膳を眺めながら、ビールの合の手に鍋の大根のちりを喰たべ進んで行つた。この料理に就ついても、彼には基礎の知識があつた。これは西園寺陶庵公が好まれる食品だということであつた。彼は人伝ひとつづてにこの事を聞いたとき、政治家の傍、あれだけの趣味人である老公が、舌に於て最後に到り付く食味はそんな簡単なものであるのか。それは思いがけない氣もしたが、しかし肯うなずかせるところのある思いがけなさでもあつた。

そして彼には、いわゆる偉い人が好んだという食品はぜひ自分も一度は味ってみようという念願があった。それは一方彼の英雄主義の現れであり、一方偉い人の探索でもあった。その人が好くという食品を味ってみて、その人がどんな人であるかを溯り知り当てることは、もつとも正直で容易い人物鑑識法のように彼には思えた。

鍋の煮出し汁は、兼て貯えの彼特製の野菜のエキスで調味されてあった。大根は初冬に入り肥えかかっていた。七つ八つの泡によつて鍋底から浮上り漂う銀杏形の片れの中で、ほど良しと思うものを彼は箸で選み上げた。手塩皿の溜醤油に片れの一角を浸し熱さを吹いては喰べた。

生で純で、自然の質そのものだけの持つ謙遜な滋味が片れを口の中へ入れる度びに脆く柔く溶けた。大まかな菜根の匂いがする。それは案外、甘いものであった。

「成程なア」

彼は、感歎して独り言をいった。

彼は盛に煮上つて来るのを、今度は立て続けに吹きもて食べた。それは食べるというよりは、吸い取るという恰好に近かった。土鼠が食い耽る飽くなき態があった。

その間、たまに彼は箸を、大根卸しの壺に差出したが、ついに煮大根の鉢にはつけな

った。

食い終つて一通り堪能たんのうしたと見え、彼は焜炉の口を閉じはじめて霰の庭を眺め遣やつた。あまり酒に強くない彼は胡座の左の膝ひざに左の肘を突立て、もう上体をふらふらさしていた。暖気をしきりに吐くのは、もはや景気附けではなく、胃拡張の胃壁の遅緩が、飲食したものの刺激に遭いうねり戻す本ものものだった。ときどき甘苦い粘塊が口中へ噎むせ上つて来る。その中には大根の片れの生嚼なまがみのものも混っている。彼は食後には必ず、この暖気をやり、そして、人前まへをも憚はばらず反芻はんそうする癖があつた。壁越しに聞いている逸子は「また、始めた」と浅間しく思う。家庭の食後にそれをする父を見慣れて、こどもの篤あつが真似まねて仕方が無いからであつた。

暖気は不快だったが、その不快を克服するため、なおもビールを飲み煙草たばこを喫すうところに、身体に非現実な美しい不安が起る。「このとき、僕は、人並の気持になれるらしい。妻も子も可愛かわいがれる——」彼はこんなことを逸子によくいう。逸子は寝かした子供に布団を重ねて掛けてやりながら、「すると、そのとき以外は、良人に螢雪あだなが綽名あだなに付けたその鼈すっぽんのような動物の気持でいるのかしらん」と疑う。

鼈四郎は、煙草を喫いながら、彼のいう人並の気持になつて、霰の庭を味つていた。時

刻は夜に入り闇の深まりも増したかに感ぜられる。庭の構いの板塀は見えないで、無限に地平に抜けている目途の闇が感じられる。小さな築山と木枝の茂みや、池と庭草は、電灯の光は受けても薄板金で張つたり、針金で輪廓を取つたりした小さなセツトにしか見えない。呑むことだけして吐くことを知らない闇。もし人間が、こんな怖ろしい暗くて鈍感な無限の消化力のようなものに捉えられたとしたならどうだろう。泣いても喚き叫んでも、追付かない、そして身体は毛氈苔に粘られた小虫のように、徐々に溶かされて行く、溶かされるのを知りつつ、何と術もなく、ジージー鳴きながら捉えられている。永遠に――。鼈四郎はときどき死ということを想い見ないことはない。彼が生み付けられた自分でも仕末に終えない激しいものを、せめて世間に理解して貰おうと彼は世間にうち衝つて行く。世間は他人ごとどころではないと素気なく弾ね返す。彼はいきり立ち武者振りついて行く。気狂い染みているとて今度は体を更わされる。あの手この手。彼は世間から拒絶されて心身の髓に重苦しくてしかも薄痒い疼きが残るだけの性抜きに草臥れ果てたとき、彼は死を想い見るのだつた。それはすべてを清算して呉れるものであつた。想い見た死に身を横えるとき、自分の生を眺め返せば「あれは、まず、あれだけのもの」と、あつさり諦められた。潔い苦笑が唇に泛べられた。かかる死を時せつ想い見ないで、なんで自分のような

激しい人間が三十に手の届く年齢にまでこの世に生き永らえて来られようぞと彼は思う。

生を顧みて「あれは、まず、あれだけのもの」と諦めさすところの彼の想い見た死はまた、生をそう想い諦めさすことによつてそれ自らを至つて性の軽いものにした。生が「あれは、まず、あれだけのもの」としたなら、死もまた「これは、まず、これだけのもの」に過ぎなかつた。彼は術学的な口を利くことを好むが、彼には深い思惟の素養も脳力も無い筈である。

これは全く押し詰められた体験の感じから来たもので、それだけにまた、動かぬものであつた。彼は少青年の頃まで、拓本の職工をしていたことがあるが、その拓本中に往々出て来る死生一如とか、人生一泡滓とかいう文字をこの感じに於て解していた。それ故にこそ、とどのつまりは「うまいものでも食つて」ということになつた。世間に肩肘張つて暮すのも左様大儀な芝居でもなかつた。

だが、今宵の闇の深さ、粘つこさ、それはなかなか自分の感じ捉えた死などいう潔く諦めよいものとは違つていて、不思議な力に充ちている。絶望の空虚と、残忍な愛とが一つになつていて、捉えたものは嘗め溶し溶し尽きたら、また、原形に生み戻し、また嘗め溶す作業を永遠に、繰返さでは満足しない執拗さを持つてゐる。こんな力が世の中に在る

のか。鼈四郎は、今迄、いろいろの食品を貪り味^{むさぼ}つてみて、一つの食品というものには、意志と力があつてかくなりわい出たもののように感じていた。押^{おし}拡^{ひろ}げて食品以外の事物にも、何かの種類の意味で味いというものを帯びている以上、それがあるように思われている。だが、今宵の闇の味い！ これほど無窮無限と繰返しを象徴しているものは無かつた。人間が虫の好く好物を食べても食べても食べ飽きた気持がしたことはない。あの虫の好きと一路通ずるものがありはしないか。

これは天地の食欲とでもいうものではないかしらん、これに較^{くら}べると人間の食欲なんて高が知れている。

「しまった」と彼は呟^{つぶや}いてみた。

彼は久振りで、自分の嫌な過去の生い立ちを点検してみた。

京都の由緒ある大きな寺のひとり子に生れ幼くして父を失つた。母親は内縁の若い後妻で入籍して無かつたし、寺には寺で法縁上の紛^{ふん}擾^{じょう}があり、寺の後董^{ごとう}は思いがけない他^よ所^その方から来てしまった。親子のものはほとんど裸同様で寺を追出される形となつた。こ

れみな恬澹てんたんな名僧といわれた父親の世務をうるさがる性癖から来た結果だが、母親はどういうものか父を恨まなかった。「なにしろこどものような方だったから罪はない」そしてたつた一つの遺言ともいふべき彼が誕生したときといったという父の言葉を伝えた。「この子がもし物ごころがつく時分わしも老齡としじゃから死んだるかも知れん。それで苦勞して、なんでこんな苦しい娑婆しゃばに頼みもせんに生み付けたのだと親を恨むかも知れん。だがそのときはいつてやりなさい。こつちとて同じことだ、何でも頼みもせんに親に苦勞をかけるようなこの苦しい娑婆に生れて出て来なすつたのだお互いさまだ、と」この言葉はとも薄情にとれた、しかし薄情だけでは片付けられない妙な響が鼈四郎の心に残された。

はじめは寺の弟子たちも故師の遺族に恩を返すため順番にめいめいの持寺に引取つて世話をした。しかしそれは永く続かなかつた。どの寺にも寄食かかりゆうじ人を息詰らす家族というのがあつた。最後に厄介になつたのは父の碁敵であつた拓本職人の老人の家だつた。貧しいが鰥やもめぐら暮しなので気は楽だつた。母親は老人の家の煮炊き洗濯の面倒を見てやり、彼はちようど高等小学も卒業したので老人の元に法ほうじょう帖てふ造りの職人として仕込まれることになつた。老人は変り者だつた、碁を打ちに出るときは数日も家に帰らないが、それよりも春秋の頃おい小学校の運動会が始り出すと、彼はほとんど毎日家に居なかつた。京都の

市中や近郊で催されるそれを漁り尋ね見物して来るのだった。「今日の××小学校の遊戯はよく手が揃った」とか、「今日の△△小学校の駄足競争で、今迄にない早い足の子がいた」とか噂して悦んでいた。

その留守の間、彼は糊臭い仕事場で、法帖作りをやっているのだが、墨色に多少の変化こそあれ蝉翅揚といったところで、烏金揚といったところで再び生物の上には戻つて来ぬ過去そのものを色にしたような非情な黒に過ぎない。その黒へもって行つて寒白い空閑を抜いて浮出す拓本の字劃というものは少年の鼈四郎にとつてまたあまりに寂しいものであった。「雨降りあとじや、川へいて、雑魚など、取つて来なはれ、あんじよ、おいしゅう煮て、食べまひよ」継ものをしていた母親がいった。鼈四郎は箆を持って堤を越え川へ下りて行く。

その頃まだ加茂川にも小魚がいた。季節季節によつて、鮠、川鯨、鮠、雨降り揚句には鮒や鰻も浮出るとんだ獲ものもあつた。こちらの河原には近所の子供の一群がすでに漁り騒いでいる。むこうの土手では摘草の一家族が水ぎわまでも摘み下りている。鞍馬へ岐れ路の堤の辺には日傘をさした人影も増えている。境遇に負けて人臆れのする少年であつた鼈四郎は、これ等の人気を避けて、土手の屈曲の影になる川の枝流れに、芽出し柳の

参差を盾に、姿を隠すようにして漁った。すみれ草が甘く匂う。糺の森がぼーっと霞んで見えなくなる。おや自分は泣いてるなと思つて眼瞼を閉じてみると、雫の玉がブリキ屑に落ちたかしてぽとんという音がした。器用な彼はそれでも少しの間に一握りほどの雑魚を漁り得る。持つて帰ると母親はそれを巧に煮て、春先の夕暮のうす明りで他人の家の留守を預りながら母子二人だけの夕餉をしたためるのであった。

母親は身の上の素性を息子に語るのを好まなかつた。ただ彼女は食べ意地だけは張つていて、朝からでも少しのおなまぐさが無ければ飯の箸は取れなかつた。その言訳のように彼女はこういつた。「なんしい、食べ辛棒の土地で気儘放題に育てられたもんやて！」

鼈四郎は母親の素性を僅に他人から聞き貯めることが出来た。大阪船場目ぬきの場所にある旧舗の主人で鼈四郎の父へ深く帰依していた信徒があつた。不思議な不幸続きで、店は潰れ娘一人を残して自分も死病にかかつた。鼈四郎の父はそれまで不得手ながら金銭上の事に関つてまでいろいろ面倒を見てやつたのだがついにその甲斐もなかつた。しかし、すべてを過去の罪障のなす業と諦めた病主人は、罪障消滅のためにも、一つは永年の恩義に酬ゆるため、妻を失つてしばらく鰥暮しでいた鼈四郎の父へ、せめて身の周りの世話でもさせたいと、娘を父の寺へ上らせて身罷つたという。他の事情は語らない母親も

「お罪障消滅のため寺方に上った身が、食べ慾ぐらい断ち切れんで、ほんまに濟まんと思
うが、やつぱりお罪障の残りがあるかして、こればかりはしようもない」この述懐だけは
亦ときどき口に洩しながら、最小限度のつもりにしる、食べもの漁りはやめなかつた。

少青年の頃おいになつて鼈四郎は、諸方の風雅の蕙の手伝いに頼まれ出した。市民一般
に興味人をもつて任ずるこの古都には、いわゆる琴棋書画の会が多かつた。はじめ拓本職
人の老人が出入りの骨董商に展観の会があるのを老人に代つて手伝いに出たのがきつ
かけとなり、あちらこちらより頼まれるようになった。才はじけた性質を人臆しする性
質が暈しをかけている若者は何か人目につくものがあつた。薄皮仕立で桜色の皮膚は下
膨れの顔から胸鼈へかけて嫩葉のような匂いと潤いを持っていた。それが拓本老職人の
古風な着物や袴を仕立て直した衣服を身につけて座を斡旋するさまも趣味人の間には好
もしかつた。人々は戯れに千の与四郎、——茶祖の利休の幼名をもつて彼を呼ぶようにな
つた。利休の少年時が果して彼のように美貌であつたか判らないが、少くとも利休が与四
郎時代秋の庭を掃き浄めたのち、あらためて一握りの紅葉をもつて庭上に撒き散らしたと
いう利休の趣味性の早熟を物語る逸話から聯想して来る
与四郎は、彼のような美少年で
なければならなかつた。与えられたこの戯名を彼も諾い受け寧ろ少からぬ誇りをもつて自

称するようにさえなつた。

洒落しやれたお弁当が食べられ、なにがしかずつ心付けの銭さえ貰えるこの手伝いの役は彼よつこを悦よろこばした。そのお弁当を二つも貰つて食べ抹茶も一服よばれたのち、しばらくの休憩をとるため、座敷に張り廻めぐらした紅白だんだらの幔まんまく幕を向うへ弾はね潜ひそつて出る。そこは庭に沿したがつた椽えんがわ側であつた。陽ひはさんさんと照り輝いて満庭の青葉若葉から陽しづくの雫が滴たつているようである。椽も遺憾なく照らし暖められている。彼はその椽に大の字なりに寝て満腹なの腹を撫なでさすりながらとうとうとしかける。智恩院聖護院の昼鐘が、まだ鳴り止まない。夏なつがすみ霞 棚引きかけ、眼を細めてでもいるような和なごみ方の東山三十六峯。ここの椽に人影はない。しかし別書院の控室の間から演奏場へ通ずる中廊下には人の足音が地車でも続いて通つているよう絶えずとどろと鳴っている。その控室の方に当つては、もはや、午後の演奏の支度にかかつているらしく、尺八に対して音締めを直している琴こきゆうや胡弓こきゆうの音が、音のこぼれもののように聞えて来る。間に混つて盲人の鼻詰り声、娘たちの若い笑い声。若者の鼈四郎は、こういう景致や物音に遠巻きされながら、それに煩わづわされず、逃れて一人うとうとする束つかの間まを楽しいものに思い做なした。腹なに満ちた咀そしやくぶつ嚼物ぶつは陽のあたためを受けて滋味は油のように溶け骨、肉を潤あまし剩あまり今や身体の全面にまでにじみ出して来る

のを艶やかに感ずる。金目がかかり、値打ちのある肉体になつたように感ずる。心の底に押籠められながら焦々した怒ろしい想いはこの豊潤な肉体に対し、いよいよその豊潤を刺激して引立てる内部からの香辛料になつたような気がする。その快さ甘くときめかす匂い、芍薬畑が庭のどこかにあるらしい。

古都の空は浅葱色に晴れ渡つてゐる。和み合う睫の間にか、充ち足りた胸の中にか白雲の一浮きが軽く渡つて行く。その一浮きは同時にうたた寝の夢の中にも通い、濡れ色の白鳥となつて翼に乗せて過ぎて過ぎる。はつ夏の哀愁。「与四郎さん、こんなところで寝てなはる。用事あるんやわ、もう起きていなあ、」鼻の尖を摘まれる。美しい年増夫人のやわらかくしなやかな指。

鼈四郎はだんだん家へ帰らなくなつた。貧寒な拓本職人の家で、女餓鬼の官女のような母を相手にみじめな暮しをするより、若い女のいる派手で賑かな会席を渡り歩いている方がその日その日を面白く糊塗できて気持よかつた。何か一筋、心のしんになる確りした考え。何か一業、人に優れて身の立つような職能を捉えないでは生きて行くに危いという不安は、殊にあの心の底に伏つてゐる焦々した怒ろしい想いに煽られると、居ても立つてもいられない悩みの焰となつて彼を焼くのであるが、その焦熱を感じずれば感ずるほど、彼

はそれをまわりで擦こすつて搔かき落すよう、いよいよ雑多と変化の世界へ紛れ込んで行くのであった。彼はこの間に持つて生れた器用さから、趣味の技芸なら大概のものを田舎初段程度にこなす腕を自然に習い覚えた。彼は調法な与四郎となつた。どこの師匠の家でも彼を歓迎した。棋院では初心の客の相手役になつてやるし、琴の家では琴師を頼まないでも彼によつて絃げんの緩みは締められた。生花の家でお嬢さんたちのための花の下慥え、茶の湯の家ではまたお嬢さんや夫人たちのための点茶や懐石のよき相談相手だつた。拓本職人は石刷りを法帖ほうじょうに仕立てる表具師のようなこともやれば、石刷りを版木に模刻して印刷をする彫版師のような仕事もした。そこから自ずから彼は表具もやれば刀を採つて、木彫篆てん刻くの業もした。字は宋拓を見よう見真似みまねに書いた。画は彼が最得意とするところで、ひよつとしたら、これ一途いちずに身を立てて行こうかとさえ思うときがあつた。

頼めば何でも間に合あわして呉くれる。こんな調法人をどこで歓迎しないところがあろうか。彼は紛れるともなく、その日その日の憂さを忘れて渡り歩いた。母は鼈四郎が勉強のため世間に知識を漁あさつていて今に何か掴つかんで来るものと思ひ込んでるので呑のみ込み顔で放つて置いたし、拓本職人の老爺ろうやは仕事の手が欠けたのをこぼしこぼし、しかし叱言こごとというほどの叱言はいわなかつた。

師匠連や有力な弟子たちは彼を取巻のようにして瓢亭・俵やははじめ市中の名料理へ飲食に連れて行つた。彼は美食に事欠かぬのみならず、天稟てんびんから、料理の秘奥を感取つた。そうしているうち、ふと鼈四郎に気が付いて来たことがあつた。このように諸方で歓迎されながら彼は未だ嘗て尊敬というものをされたことがない。大寺に生れ、幼時だけにしろ、総領息子という格に立てられた経験のある、旧舗しにせの娘として母の持てる気位を伝えてゐるらしい彼の持前は頭の高い男なのであつた。それがただ調法の与四郎で扱ひ済されるだけでは口惜しいものがあつた。彼の心の底に伏つていつも焦々する怒ろしい想いもどうやら一半はそこから起るらしく思われて来た。どうかして先生と呼ばれてみたい。

人中に揉まれて臆おくし心はほとんど除かれてゐる彼に、この衷心から頭を擡もたげて来た新しい慾望は、更に積極へと彼に拍車をかけた。彼は高飛車に人をこなし付ける手を覚え、輕け蔑いべつして鼻であしろう手を覺えた。何事にも批判を加えて己れを表示する術すべも覺えた。彼はなりの恰かっ好こうさえ肩かた肘ひじを張ることを心掛けた。彼は手鏡を取出してつくづく自分を見る。そこに映り出る青年があまりに若く美しくして先生と呼ばれるに相応ふさわしい老成した貫禄が無いことを嘆いた。彼はせめて言葉附だけでもいかつく、ませたものにしようにと骨を折つた。彼の取つて付けたような豹ひょうへん變の態度に、弱いものは怯おびえて敬遠し出した。強

いものは反撥はんぱつして罵ののしった。「なんだ石刷り職人の癖に」そして先生と云って呉れるものは料理人だけだった。

「与四郎は変った」「おかしゆうならはった」というのが風雅社会の一般の評であった。彼の心地に宿った露草の花のようないじらしい恋人もあつただけけれども、この噂うわさに脆もろくも破れて、実を得結ばずに失せた。

若者であつて一度この威猛いたげだか高な誇張の態度に身を任せたものは二度と沈潜して肌質きめをこまかくするのは余程難しかった。鼈べつしろう四郎はこの目的外れの評判が自分のどこの辺から来るものか自分自身に向つて知らないとはいいい徹せなかつた。「学問が無いからだ」この事實は彼に取つて最も痛くていまましい反省だった。そして今更に、悲運な境遇から上の学校へも行けず、秩序立つた勉強の課程も踏めなかつた自分を憐あわれむのであつた。しかしこれを恨みとして、その恨みの根を何処へ持つて行くのかとなると、それはまたあまりに多岐わたに亘り複雑過ぎて当時の彼には考え切れなかつた。嘆くより後おくれ走ばせでも秘ひそかに学んで追い付くより仕方がない。彼はしきりに書物を読もうと努めた。だが才気とカンと苦勞で世間のあらましは、すでに結論だけを摘み取つてしまつている彼のような人間にとつて、その過程を煩わしく諄くどく記述してある書物というものを、どうして迂遠うえんで悪わるていねい

以外のものに思い做なされようぞ。彼は頁ページを開くとすぐ眠なくなった。それは努めて読んで行くとその索さく寞ぼくさに頭が痛くなつて、しきりに喉こう頭とうへ味なるものが恋い慕われた。彼は美味な食物を漁あさりに立上つてしまった。

結局、彼は遣やり慣れた眼学問、耳学問を長じさせて行くより仕方なかつた。そしていま迄、下手したてに謙遜けんそんに学び取つていた仕方は今度からは、争い食つてかかる紛擾ふんじょうの間に相手から腕もぎ取る仕方に方法を替えたに過ぎなかつた。それほどまでにして彼は尊敬なるものを贏かち得たかつたのであろうか。然しかり。彼は彼が食味に於て意識的に人生の息抜きを見出す以前は、実に先生といわれる敬称は彼に取つて恋人以上の魅力を持つていたのだつた。彼はこの仕方によつて数多の旧知己をば失つたが、僅わずかばかりの変りものの知遇者を得た。世間には唾いがみ合う鑼どら、捩ねじり合う銅によう 鈇ぼちのような騒々しいものを混えることに於て、却かえつて知音や友情が通じられる支那樂のような交際も無いことはない。鼈四郎はまが向き嵌はまつて行つたのはそういう苦勞胼胝たごで心の感膜が厚くなつてゐる年長の連中であつた。

その頃、京極でモダンな洋食店のメーゾン檜垣の主人もその一人であつた。このアメリカ帰りの料理人は、妙に芸術や芸術家の生活に渴仰をもつていて、店の監督の暇には油画を描いていた。寝泊りする自分の室は画室のようにしていた。彼は客の誰彼つかまを掴つかまえては二

ユーヨークの グリーンウィッチビル 文士村の話をした。パリの芸術街を真似ようとするこの街はアメリカ人氣質と、憧憬による誇張によつて異様で刺激的なものがあつた。主人はそれを語るのに使徒のような情熱をもつてした。店の施設にもできるだけ応用した。酒神バックスの祭の夕あおろうそく青蠟燭の部屋、新しいものに牽ひかれる青年や、若い芸術家がこの店に集つたことは見易き道理である。この古都には若い人々の肺には重苦しくて寂寥せきりょうだけの空氣があつた。これを撥はね除のけ攪かき壊すには極端な反撥はんぱつが要つた。それ故、一般に東京のモダンより、上方のモダンの方が調子外れで葉が強いとされていた。

鼈四郎はこの店に入浸るようになった。お互いに基礎知識を欠く弱味を見透すが故に、お互いに吐き合う氣焰きえんも圧迫感を伴わなかつた。飄々ひょうひょうとカンのまま雲に上り空に架することができた。立会いに相手を傲慢ごうまんで呑のんでかかつてから輕蔑けいべつの齒を剥むき出して、意見を噛かみ合わす無遠慮な談敵を得て、彼等は渾身こんしんの力が出し切れるように思った。その間に狡すさを働かして耳学問を盗み合い、挽ひぎ取る利益も彼等には欲よろこびであつた。鼈四郎が東洋趣味の幽玄を高嘯こうしやうするに對し、檜垣の主人は西洋趣味の生々なまなましさを誇つた。かかるうち知識は交換されて互いの葉籠やくろうちゆう中に収められていた。

いつでも意見が一致するのは、芸術至上主義の態度であつた。誤つて下層階級に生い立

たせられたところから自恃じじに相応わしい位置にまで自分を取戻すにはカンで攀よじ登れる芸術と称するもの以外には彼等は無いと感じた。彼等は鑑識の高さや広さを誇った。この点ではお互いに許し合った。琴棋書画、それから女、芝居、陶器、食もの、思想に互わたるものまでも、分け距へだてなく味い批評できる彼等をお互いに褒め合った。「僕らは、天才じゃね」「天才じゃねえ」

檜垣の主人は、胸の病持ちであつた。彼が独身生活を続けるのも、そこから来るのであつたが、情慾は強いかして彼の描く茫ぼうぼう漠とした油絵にも、雑多あつに蒐しゅうめられる蒐しゅう集しゅう品ひんにも何かエロチックの匂においがあつた。瘦やせて青黒い隈くまの多い長身の肉体は内部から慾求するものを充みたし得ない悩みにも喘あえいでいた。それに較くらべると中背ではあるが異常に強壯な身体を持つている魘あ四郎はあらゆる官能慾むさぼを食くるに堪たえた。ある種の嗜慾しよく以外は、貪あり能とう飽和点を味い締められるが故に却かえつて恬てん淡たんになれた。

檜垣の主人は、魘あ四郎を連れて、鴨川の夕涼みのゆかから、宮川町辺の赤黒い行灯あんどんのかげに至るまで、上品や下品の遊びに連れて歩いた。そこでも、味あままがゆえにいつも暗鬱あんうつな未練を残している人間と、飽和に達するがゆえに明色の恬淡ささえに汚よる人間とは極端な対象を做した。魘あ四郎は檜垣の主人の暗鬱な未練に対し、本能の浅間しさと共に本能

の深さを感じ、檜垣の主人は鼈四郎の肉体に対して嫉妬しつとと驚異を感じた。二人は心こころ秘ひそかに「あいつ偉い奴じゃ」と互いに舌を巻いた。

起伏表裏がありながら、また最後に認め合うものを持つ二人の交際は、縄のように絡み合い段々その結ばれを深めた。正常な教養を持つ世間の知識階級に対し、脅威を感じるが故に、睥睨へいげいしようとする職人上りで頭が高い壮年者と青年は自らの孤独な階級に立籠たてこもつて脅威し来るものを罵る快を貪るには一あつて二無き相手だった。彼等は毎日のように会わないでは寂しいようになつた。

鼈四郎は檜垣の主人に対しては対蹠たいしよてき的に、いつも東洋芸術の幽邃ゆうすい高遠こうえんを主張して立向う立場に立つのだが、反噬はんぜいして来る檜垣の主人の西洋芸術なるものを、その範とするところの名品の複写などで味わされる場合に、躊躇ちゆうちよ踏ちよなく感得されるものがあつた。檜垣の主人が持ち帰つたのは主にフランス近代の巨匠のものだったが、本能を許し、官能を許し、享受を許し、肉情さえ許したものであることは東洋の躰しつけと道徳の間から僅にそれ等を垣間見かいまさせられていたものにと取つては驚きの外無かつた。恥も外聞も無い露むき出しで、きまりが悪いほどだった。「こいつ等は、まるで素人じゃねえ、」鼈四郎は檜垣の主人に向つてはこうも押えた口を利くようなものの、彼の肉体的感覚は発言者を得たように喝かつさ

采した。

彼はこの店へ出入りをして食べ増した洋食もうまかったし、主人によっていろいろ話して聴かされた西洋の文化的生活の様式も、便利で新鮮に思われた。

鼈四郎はこれ等の感得と知識をもつて、彼の育ちの職場に引返して行つた。彼は書画に携る輩やからに向つては、テッサンを説き、ゴッホとかセザンヌとかの名を口にした。茶の湯生花の行われる巷ちまたに向つては、テイパーテイの催しを説き、アペリチーフの功德を説き、コンポジションとかニユアンスとかいう洋名の術語を口にした。

東洋の諸芸術にも実践上の必需から来る自らなるそれ等にあつて、ただ名前と伝統が違つていただけだつた。それゆえ、鼈四郎のいうことはこれ等に携る人々にもほぼ察しはつき、心ある者は、なんだ西洋とてそんなものかと嵩たかを括くくはしたが当時モダンの名に於て新味と時代適應性を西洋的なものから採入れようとする一般の風潮は彼の後姿に向つては「葵あおい 祭まつりの竹の欄干てすりで」青く擦すれてなはると蔭口を利きながら、この古都の風雅の社会は、彼の前に廻まわつては刺激と思ひ付を求めねばならなかつた。彼の人気は恢かい復ふくした。三曲の演奏にアンコールを許したり、裸体彫像に生花を配したり、ずいぶん突飛なことも彼によって示唆されたが、椅子いすテーブルの点茶式や、洋食を緩和して懷石の献立中に含め

ることや、そのときまで、一部の間にしか企てられていなかった方法を一般に流布せしめる椽えんの下の力持とはなつた。彼は、ところどころで「先生」と呼ばれるようになった。

彼はこの勢を駆つて、メーゾン檜垣ひがきに集る若い芸術家の仲間なかつちに割り込んだ。彼の高飛車と粗雑はさすがに、神経のこまかいインテリ青年たちと肌合あはいの合わないものがあつた。彼は彼等を吹き靡なびけ、煙けむりに巻いたつもりでも最後に、沈黙の中で拒こまれてゐるコツンとしたものを感じた。それは何とも説明し難いものではあるが彼をして現代の青年の仲間入りしようとする勇氣を無雑作むざむざに取とり拉ひぐ薄氣味うすけい悪い力を持つていた。彼は考えざるを得なかつた。

春の宵であつた。檜垣ひがきの二階に、歓迎会の集りがあつた。女流歌人で仏敎家の夫人がこの古都のある宗派の女学校へ講演に頼まれて来たのを幸、招いて会食するものであつた。画家おとの良人おとも一しよに来ていた。テーブルスピーチのようなこともあつさり切上きりあがりり、内輪うちわで寛くわいだ会に見えた。しかし鼈べつしろう四郎しろうにとつてこの夫人に対する氣構けいこうえは兼々かねかね雑誌などで見て、納ならぬものがあつた。芸術をやるものが宗教しんじゆうに捉とらわれるなんて――、夫人が仏敎を提唱ていせうすることは、自分に幼時から辛い目を見せた寺や、境遇の肩かたを持つもののようにも感じられた。とうとう彼は雑談の環わんの中から声を皮肉ひにくにして詰なつた。夫人が童女どうにょのまままで

大きくなったような容貌ようぼうも苦勞なしに見えて、何やら苛めいじ付けたかった。

夫人はちよつと無礼なといった面持をしたが、怒りは嘸のみ込んでしまつて答えた、「いえ、だから、わたくしは、何も必要のない方にやれとは申上ちやおりません」鼈四郎は嵩かさにかかつて食つてかかったが、夫人は「そういう聞き方をなさる方には申上られません」と繰返すばかりであつた。世間知らずの少女が意地を張り出したように鼈四郎にはとれた。一時白けた雰囲氣の空虚も、すぐまわりから歓談で埋められ、苦り切り腕組をして、不満を示している彼の存在なぞは誰も氣付かぬようになつた。彼の怒りは縮れた長髪の方にまでも漲みなぎつたかと思われた。その上、彼を拗こじらすためのように、夫人は勧められて「京の四季」かなにかを、みんなの余興の中に加つて唄うたつた。低めて唄つたものそれは暢のびやかで楽しそうだった。良人の画家も列座と一しよに手を叩たたいている。

すべてが自分に対する侮蔑ぶべつに感じられてならない鼈四郎は、どんな手段を採つてもこの夫人を屈服し、自分を認めさそうと決心した。彼は、檜垣の主人を語つて、この画家夫妻の歸りを待ち捉え、主人の部屋の画室へ、作品を見に寄つて呉くれるよう懇請した。その部屋には鼈四郎の制作したのも数々置いてあつた。

彼は遜へりくる態度を装い、強いて夫人に向つて批評を求めた。そこには額仕立ての書画や篆て

額んがくがあつた。夫人はこういうものは好きらしく、親し気に見入って行つたが、良人を顧みていった。「ねえ、パパ、美しくできてるけど、少し味に傾いてやしない？」良人は気の毒そうにいった。「そうだなあ、味だな」鼈四郎は哄こうしやう笑して、去り気ない様子を示したが、始めて人に肺腑はいふを衝つかれた気持がした。良人の画家に「大陸的」と極きめをつけられてよいのか悪いのか判わからないが、気に入つた批評として笑窪えくぼに入つた檜垣の主人まで「そういえば、なるほど、君の芸術は味だな」と相槌あいづちを打つ苦々しき。

鼈四郎は肺腑を衝かれながら、しかしもう一度執拗しつように夫人へ反撃を密謀した。まだ五六日この古都に滞在して春のゆく方を見巡みめぐつて帰るといふ夫妻を手料理の昼食に招いた。自分の作品を無雑作に味と片付けてしまうこの夫人が、一体、どのくらいその味なるものに鑑識を持つているのだろう。食もので試してやるのが早手廻はやてまわしだ。どうせ有閑夫人の手に成る家庭料理か、料理屋の形式的な食品以外、真のうまいものは食つてやしまい。もし彼女に鑑識が無いのが判つたなら彼女の自分の作品に対する批評も、慎おそれるに及ばないし、もし鑑識あるものとしたなら、恐らく自分の料理の技倆ぎりように頭を下げて感心するだろう。さすればこの方で夫人は征服でき、夫人をして自分を認め返さすものである。

幸に、夫妻は招待に応じて来た。

席は加茂川の堤下の知れる家元の茶室を借り受けたものであった。彼は呼び寄せたある指導下の助手の料理人や、給仕の娘たちを指揮して、夫妻の饗宴きょうえんにかかった。

彼はさきの夜、檜垣の歓迎会の晩餐ばんさんにて、食事のコース中、夫人が何を選び、何を好み食べたか、すっかり見て取つていた。ときどき聞きもした。それは努めてしたのではないが、人の嗜慾しよくに対し、間諜かんちようけん犬のような嗅覚きゆうかくを持つ彼の本能は自ずと働いていた。夫人の食品の好みは専門的に見て、素人なのだか玄人なのだか判らなかつた。しかし嗜求する虫の性質はほぼ判つた。

鼈四郎は、献立の定慣や和漢洋の種別に關係なく、夫人のこの虫に向つて満足さす料理の仕方をした。ああ、そのとき、何という人間に対する哀愛の氣持が胸の底から湧わき出したことだろう。そこにはもう勝負の氣もなかつた。征服慾も、もちろんない。

あの大きな童女のような女をして眼を瞠みはらせ、五感から享うけ入れる人の世の満足以上のものを彼女をして無邪氣に味い得しめたなら料理それ自身の手柄だ。自分なんかの存在はどうだつてよい。彼はその氣持から、夫人が好きだといつた、季節外れの蟹かにを解したり、一口蕎麦そばを松江風に捏こねたりして、献立に加えた。ふと幼いとき、夜泣きして、疝かんの虫の好く、宝来豆ほうらいまめというものを欲しがつたとき老僧の父がとぼとぼと夜半の町へ出て買つて

来て呉れたときの気持を想い出した。鼈四郎は捏ね板へ涙の雫を落すまいとして顔を反向けた。所詮、料理というものは勞りなのであろうか。そして勞りごころを十二分に發揮できる料理の相手は、白痴か、子供なのではあるまいか。

しかし鼈四郎は夫人が通客であった場合を予想し、もしその眼で見られても恥しからぬよう、坂本の諸子川の諸子魚とか、鞍馬の山椒皮なども、逸早く取寄せて、食品中に備えた。

夫人は、大事そうに、感謝しながら食べ始めた。「この子附け鱈の美しいこと」「このえび諸の肌目こまかく煮えていますよ」とそれから唇にから揚の油が浮くようになってからは、ただ「おいしいわ」「おいしいわ」というだけで、専心に喰べ進んで行く。鼈四郎は、再び首尾はいかかと張り詰めていたものが食品の皿が片付けられる毎に、ずしんずしんと減って、気の衰えをさえ感ずるのだった。

夫人も健啖だったが、画家の良人はより健啖だった。みな残りなく食べ終り、煎茶碗を取上げながらいった。「ご馳走さまでした。御主人に申すが、この方が、よつぽど、あなたの芸術だね」そして夫人の方に向い、それを皮肉でなく、好感を持つ批評として主人に受取らせるよう夫人の註解した相槌を求めるような笑い方をしていた。夫

人も微笑したが、声音は生真面目だった。「わたくしも、警句でなく、ほんとにそう思いますわ。立派な芸術ですわ。」

鼈四郎は凶星に嵌めたと思うと同時に、ぎくりとなった。彼はいかにふだん幅広い口を利こうと、衷心では料理より、琴棋書画に位があつて、先生と呼ばれるに相応わしい高級の芸種であるとする世間月並の常識を無みしようもない。その高きものを前日は味とされ、今日低きものに於て芸術たることを認められた。天分か、教養か、どちらにしろ、もはや自分の生涯の止めを刺された気がした。この上、何をかいおうぞ。

加茂川は、やや水嵩増して、さき濁りの流勢は河原の上を八千岐に分れ下へ落ちて行く、蛇籠に阻まれる花芥の渚の緑の色取りは昔に変わりはなく、魚は少なくなった。かして、漁る子供の姿も見えない。堤の芽出し柳の煙れる梢に春なかばの空は晴れみ曇りみしている。

しばらく沈黙の座に聞澄している涼々とした川音は、座をそのままなつかしい国へ押し移す。鼈四郎は、この川下の対岸に在つて大竹原で家棟は隠れ見えないけれども、まさしくこの世に一人残っている母親のことを思い出す。女餓鬼の官女のような母親はそこで食味に執しながら、一人息子が何でもよいたつきの業を得て帰つて来るのを待っている。

しばらく家へは帰らないが、拓本職人の親方の老人は相変らず、小学校の運動会を漁り歩き遊戯をする児童たちのいたいけな姿に老いの迫るを忘れようと努めているであろうか。

鼈四郎は、笑いに紛らしながら、幼時、母子二人の夕餉ゆうげの菜のために、この河原で小魚すくを掬い帰った話をした。「いままで、ずいぶん、いろいろなうまいものも食いましたが、いま考えてみると、あるとき母が煮て呉くれた雑魚ざごの味ほどうまいと思ったものに食い当りません」それから彼は、きょう、料理中に感じたことも含めて、「すると、味と芸術の違いはいたわ労りがあると、無いとの相違でしようかしら」といった。

これに就つき夫人は早速に答えず、先ず彼等が外遊中、巴里パリの名料理店フォイヨで得た経験じゆうたを話した。その料理店の食堂は、扉の合せ目も床の敷ものも物音立てぬよう軟じゆうた絨じゆうた氈じゆうたや毛織物で用意された。色も刺激を抜いてある。天井や卓上の燭光も調節してある。総ては食味に集中すべく心が配られてある。給仕人はイゴとか男性とかいういかついものは取除かれた品よく晒さらされた老人たちで、いずれはこの道で身を滅した人間であろう、今は人が快樂することによって自分も快樂するという自他移心の術に達してるように見える。食事は聖餐せいさんのような厳かさ、ランデブウのようなしめやかさで執り行われて行く。今やテーブルの前には、はつ夏の澄める空を映すかのような薄浅黄色のスープが置かれてあ

る。いつの間に近寄つて来たか給仕の老人は輪切りにした牛骨の載れる皿を銀盤で捧げて立っている。老人は客が食指を動し来る呼吸に坩つぼを合せ、ちよつと目礼して匙さしで骨の中から髓を掬い上げた。汁の真中へ大切に滑り浮す。それは乙女の娘きしやうのころを玉に凝らしたかのよう、ぶよぶよ透けるが中にいささか青春の潤うるみに澱よどんでいる。それは和食の鯛の眼肉あつものの羹あつものにでも当る料理なのであろうか。老人は恭しく一礼して数歩退いて控えた。いかに満足に客がこの天の美漿びしやうを啜すい取るか、成功を祈るかのよう敬虔けいけんに控えている。もちろん料理は精製されてある。サービスは満点である。以下デザートを終えるまでのコースにも、何一つ不足と思えるものもなく、いわゆる善尽し、美尽しで、感嘆の中に食事を終えたことである。

「しかしそれでいて、私どもにはあとで、嘗なめこくられて、扱まわい廻まわされたという、後口に少し嫌なものが残されました。」

「面と向つて、お褒めするのも気まりが悪うございますから、あんまり申しませんが、そういうっちゃ何ですが、今日の御料理には、ちぐはぐのところがございますけれど、まことというものが徹しているような気がいたしました。」

意表な批評が夫人の口から次々に出て来るものである。料理に向つてまことなぞという

言葉を使つたのを鼈四郎は嘗て聞いたことはない。そして、まこと、まごころ、こういうものは彼が生れや、生い立ちによる拗ねた心からその呼名さえ耳にすることに反感を持つて来た。自分がもしそれを持つたなら、まるで、変り羽毛の雛鳥のように、それを持たない世間から寄つて蝟つて突き苛められてしまふではないか。弱きものよ汝の名こそ、まこと。自分にそういうものを無みし、強くあらんがための芸術、偽りに堪えて慰まんための芸術ではないか。歌人の芸術家だけに旧臭く否味なことをいう。道德かぶれの女学生でもないそんな芸術批評。歯牙に懸けるには足りない。

鼈四郎はこう思つて来ると夫妻の権威は眼中に無くなつて、肩肘がむくむくと平常通り聳立つて来るのを覚えた。「はははは、まこと料理ですか」

車が迎えに来て、夫妻は暇を告げた。鼈四郎はこれからどちらへと訊くと、夫妻は壬生寺へお詣りして、壬生狂言の見物にと答えた。鼈四郎は揶揄して「善男善女の慰安には持つて来いですね」というと、ちよつと眉を顰めた夫人は「あれをあなたは、そうおとりになりますの、私たちは、あの狂言のでんがんでんがんという単調な鳴物を地獄の音楽でも聞きに行くように思つて参りますのよ」というと、良人の画家も、実は鼈四郎の語気に気が付いていて癩に触つたらしく「君おれたちは、善男善女でもこれで地獄は一遍たつぷり

通つて来た人間たちだよ。だが極楽もあまり永く場塞ぎしては濟まないと思つて、また地獄を見付けに歩るいてるところだ。そう甘くは見なさるなよ」と窘めた。夫人はその良人の肘をひいて「こんな美しい青年を咎め立するもんじゃありませんわ。人間の芸術品が壊れますわ」自分のいったことを興がるのか、わつわと笑つて車の中へ駈け込んだ。

鼈四郎はその後一度もこの夫妻に会わないが、彼の生涯に取つてこの春の二回の面会は通り魔のようなものだった。折角設計して来た自分らしい樓閣を不逞の風が浚い取つた感じが深い芸術なるものを通して何かあるとは感づかせられた。しかし今更、宗教などという黴臭いと思われるものに関する気はないし、そうかといつて、夫人のいったまことかまごころとかいうものを突き詰めて行くのは、安道学らしくて身慄いが出るほど、怖気が振えた。結局、安心立命するものを捉えさせたいのだから。死の外にそれがあるか。必ず来て総てが帳消しされる死、この退つ引ならぬものへ落付きどころを置き、その上での生きてるうちが花という気持で、せいぜい好きなことに殉じて行つたなら、そこに出て来る表現に味とか芸術とかの岐れの議論は立つまい。「いざとなれば死にさえすればいいのだ」鼈四郎は幼い時分から辛い場合、不如意な場合には逃れずさまよい込み、片息をついたこの無可有の世界の観念を、青年の頭脳で確と積極的に思想に纏め上げたつもりで

いる。これを裏書するように檜垣の主人の死が目前に見本を示した。

檜垣の主人は一年ほどまえから左のうしろ頸に癌が出はじめた。始めは痛みもなかった。ちよつと悪性のもものだから切らん方がよいという医師の意見と処法に従ってレントゲンなどかけていたが。癌は一時小さくなって、また前より脹れを増した。とうとう痛みが来るようになった。医者も隠し切れなくなったか肺臓癌がここに吹出したものだと宣告した。これを聞いても檜垣の主人は驚かなかつた。「したいと思つたことでできなかつたこともあるが、まあ人に較べたらずいぶんした方だろう」「この辺で節季の勘定を済すかな」笑いながらそういつた。それから身の上の精算に取りかかつた。店を人に譲り総ての貸借関係を果すと、少しばかり余裕の金が残つた。「僕は賑かなところで死にたい」彼はそれをもつて京極の裏店に引越した。美しい看護婦と、気に入りのモデルの娘を定まつた死期までの間の常備いにして、そこで彼は彼の自らいふ「天才の死」の営みにかかつた。

売り惜んだ彼が最後に気に入りの蒐集品で部屋の中を飾つた。それでも狭い部屋の中は一ぱいで猶太人の古物商の小店ほどはあつた。

彼はその部屋の中に彼が用いつけの天蓋附のベッドを据えた。もちろん贗物であるうが、彼はこれを南北戦争時分にアメリカへ流浪した西班牙王属出の吟遊詩人が用いたも

のだといつていた。柱にラテン文字で詩は彫付けてあるにはあつた。彼はそこで起上つて画を描き続けた。

癌はときどき激しく痛み出した。服用の鎮痛剤ぐらいでは利かなかつた。彼は医者に強請んで麻痺薬を注射して貰う。身体が弱るからとてなかなか注して呉れない。全身、蒼黒くなりその上、瘦さらばう骨の窪みの皮膚にはうす紫の隈まで、漂い出した中年過ぎの男は脹れ嵩張つたうしろ頸の瘤に背を踏められ侏儒にして餓鬼のようである。夏の最中のこととて彼は裸でいるので、その見苦しさは覆うところなく人目を寒気立した。痛みが襲つて来ると彼はその姿でベッドの上で躑き苦しむ。全身に水を浴びたよう脂汗をにじみ出し長身の細い肢体を振らし擦り合せ、甲斐ない痛みを抜き取ろうとするさまは、蛇が難産をしているところかなぞのように想像される。いくら認め合つた親友でも、鼈四郎は友の苦しみを看護することは好まなかつた。

苦しみなぞというものは自分一人のものだけでさえ手に剩っている。殊に不快ということとは人間の感覚に染み付き易いものだ。芸術家には毒だ。避けられるだけ避けたい。そこで鼈四郎は檜垣の病主人に苦悶が始まる、と、すーっと病居を抜け出て、茶を飲んで来るか、喋つて来るのであつた。だが病友は許さなくなつた。「なんだ意気地のない。しつか

り見とれ、かく成り果てるとまた痛快なもんじゃから——」息を喘がせながらいった。

鼈四郎は、手を痛いほど握り締め、自分も全身に脂汗をにじみ出させて、見ることに堪えていた。死は懼ろしくはないが、死へ行くまでの過程に嫌なものがあるという考えがちらりと念頭を掠めて過ぎた。だがそういうことは病主人が苦悶を深め行くにつれ却つて消えて行つた。あまりの惨ましさに痺れてぼかんとなつてしまつた鼈四郎の脳底に違つたものが映り出した。見よ、そこに蠢くものは、もはやそれは生物ではない。埃及のカタコンブから掘出した死蟻であるのか、西藏の洞窟から運び出した乾酪の屍体であるのか、永くいのちの息吹きを絶つた一つの物質である。しかも何やら律動しているところは、現代に判らない巧妙繊細な機械仕掛けが仕込まれた古代人形のようにでもある。蒼黒く燻んだ古代人形はほぼ一定の律動をもつて動く、くねくね、きゅーつきゅつと跳いて、もくんと伸び上る。顔れて、そして絶息するようにふーむと唸く。同じ事が何度も繰返される。モデル娘は惨ましさに泣きかけた顔をおかしさで歪み返させられ、妙な顔になつて袖から半分覗かしている。看護婦は少し怒りを帯びた深刻な顔をして団扇で煽いでいる。

鼈四郎は氣付いた。病友はこの苦しみの絶頂にあつて遊ぼうとしているのだ。彼は痛みに対抗しようとする肉体の自らなる跳きに、必死とリズムを与えて踊りに慥えているのだ。

そうすることが少しでも病痛の紛らかしになるのか、それとも友だちの、ふだんいう「絶倫の芸術」を自分に見せようため骨を折っているのか。病友はまた踊る、くねくね、ぎゅーつ、きゅ、もくんもくんそして顔れ絶息するようにふーむと唸く。それは回教徒の祈祷の姿に擬しつつ実は、聞えて来る活動館の安価な楽隊の音に合わせているのだった。

鼈四郎が、なお愕いたことは、病友は、そうしながら向う側の壁に姿見鏡を立てかけさせ、自分の悲惨な踊りを、自ら映しみて効果を味っていることだった。映像を引立たせる背景のため、鏡の縁の中に自分の姿と共に映し入るよう、青い壁絨と壺に夏花までベッドの傍に用意してあるのだった。鼈四郎に何か常識的な怒りが燃えた。「病人に何だって、こんなばかなことをさしとくのだ」鼈四郎はモデルの娘に当たった。モデル娘は「だって、こちらが仰しやるんですもの」と不服そうにいった。病友はつまらぬ咎め立をするなど窘める眼付をした。

三度に一度の願いが叶って医者に注射をして貰ったときには病友は上機嫌で、へらりへらり笑った。食慾を催して鼈四郎に何を作れかに作れと命じた。

葱とチーズを壺焼にしたスープ・ア・ロニオンとか、牛舌のハヤシライスだとか、莢隠元のベリグレット・ソースのサラダとか、彼がふだん好んだものを註文

したので鼈四郎は慥え易かった。しかし家鴨あひるの血を絞ってその血で家鴨の肉を煮る料理とか、大鰻をぶつ切りにして酢入りのゼリーで寄る料理とかは鼈四郎は始めてで、ベッドの上から病友に差図さずされながらもなかなか加減は難しかった。家鴨の血をアルコールランプにかけた料理盤で搔かき混ぜてみると上品なしる粉ほどの濃さや粘りとなった。これを塩胡椒しおこし、家鴨の肉の截片を入れてちよつと煮込んで食べるのだが、鼈四郎は味見をしてみるのに血生臭ちなまぐさいことはなかった。巴里パリの有名な鴨料理店の家の芸の一つでまず凝ぎつた贅ぜ沢料理いたくに属するものだと思病友はいった。鰻の寄せものは伊太利移民の貧民街などで辻つじう売りしている食品で、下層階級の食べものだった。うまいものではなかった。病友はそれらの食品にまつわる思い出でも楽しむのか、慥えてやってもろくに食べもしないで、しかし次々にふらふらと思い出しては註文した。鴨のない時期に、鴨に似た若い家鴨を探したり、夏長たけて莢さやは硬やばつてしまった中からしなやかな莢さや隠元いんげんを求めたり鼈四郎は、走り廻まわつた。病友はまたずつと溯さかのぼつた幼時の思い出を懐なつしもうとするのか、フライパンで文字焼を焼かせたり、炮烙ほうろくで焼芋を作らせたりした。

これ等を鼈四郎は、病友が一期の名残りと思えばこそ奔走しても望みを叶えさしてやるのだが、病友はこれ等を娯たのしみ終りまだ薬の気が切れずに上機嫌の続く場合に、鼈四郎を

遊び相手に勞すのにはさすがの鼈四郎も、病友が憎くなった。病友は鼈四郎にうしろ頸に脹れ上つて今は毬が覗いてるほどになつてゐる癌の瘤へ、油絵の具で人の顔を描けというのである。「誰か友だちを呼んで見せて、人面疽が出来たと巫山戯てやろう」鼈四郎が辞んでも彼は訊入れなかつた。鼈四郎は渋々筆を執つた。繻帯を除くとレントゲンの光線焦けと塗り薬とで鱈皮色になつてゐる堆いものの中には執拗な反人間の意志の固りが秘められているように思われる。内側からしんの繁凝が円味を支え保ち、そしてその上に程よい張度の肉と皮膚が覆つてゐる腫物は、鋭いメスをぐさと刺し立てたい衝動と、その意地張つた凝り固りには、ひよぐつて擲揄してやるより外に術はないという感じを与えられる。腫物の皮膚に油絵の具のつきはよかつた。彼は絵の具を介して筆尖でこの怪物の面を押し擦るタツチのうちに病友がいかにかこの腫物を憎んだか。そして憎み剩つた末が、悪戯ごころに気持をはぐらかさねばならないわけが判るような気がした。「思い切り、人間の、苦痛というものをばかにした顔に描いてやれ、腫物とは見えない人の顔に」彼は、人の顔らしく地塗りをし、隈取りをし鼻、口、眼と描き入れかけた。病友はここまですらで歯を食い縛つて我慢していたが、「た た た た た」といつて身体をすささらせた。彼はいつた。「さすがに堪らん、もう、ええ、あとはたれか痛みの無くなつた死骸に

なつてから描き足して呉れ」それゆえ、腫物の上に描いた人の顔は瞳は一方しか入れられずに、しかも、ずつてゐる。鼈四郎は病友がいった通り、彼が死んでからも顔を描き上げようとはしなかつた。隻眼を眇にして睨みながら哄笑している模造人面疽の顔は、ずつた偶然によつて却つて意味を深めたように思えた。人生の不如意を、諸行無常を眺める人間の顔として、なんで、この上、一点の描き足しを附け加える必要があらう。

鼈四郎は病友の屍体の肩尖に大きく覗いている未完成の顔をつくづく見睨り「よし」と独りいつて、屍体を棺に納め、共に焼いてしまったことであつた。

病友に痛みの去る暇なく、注射は続いた。流動物しか摺れなくなつて、彼はベッドに横わり胸を喘ぐだけとなつた。鼈四郎は、それが夜店の膾炙売りの看板である膾炙獣の乾物に似ているので、人間も変れば変わるものだと思ふだけとなつた。病友は口から入れるものは絶ち、苦痛も無くなつてしまつたらしい。医者は臨終は近いと告げた。看護婦もモデルの娘も涙の眼をしょぼしょぼさせながら帰り支度の始末を始め出した。病友は朦々として眠つてゐるのか覺めてゐるのか判らない場合が多い。けれども咽喉奥で呟くような声がしてゐるので鼈四郎が耳を近付けてみると、唄を唄つてゐるのだつた。病友がこういう唄を唄つたことを一度も鼈四郎は聞いたことはなかつた。覺束ない節を強いて聞分

けてみると、それは子守唄だった。「ねんころりよ、ねんころりねんころり」

鼈四郎の顔が自分に近付いたのを知って病友は努めて笑った。そして喘ぎ喘ぎいう文句の意味を理解に綴つづつてみるとこういうのだった。「どこを見渡してもさっぱりしてしまつて、まるで、何にもない。いくら探しても遺身かたみの品におまえにやるものが見付からないので困った。そうそう伯母さんが東京に一人いる。これは無くならないでまだある。遠方にくすくぼんやり見える。これをおまえにやる。こりやいいもんだ。やるからおまえの伯母さんにしなさい。」

病友は死んだ。店の旧取引先か遊び仲間の知友以外に京都には身寄りらしいものも一人も無かった。東京の伯母なるものに問合すと、年若いてることでもあり葬儀万端しか然るべくという返事なので鼈四郎は、主に立って取仕切り野辺の煙りにしたことであった。

その遺骨を携えて鼈四郎は東京に出て来た。東京生れの檜垣の主人はもはや無縁同様にはなつているようなものの菩提寺ぼだいじと墓地は赤坂青山辺に在った。戸主のことではあり、ともかく、骨は菩提寺の墓に埋めて欲しいという伯母の希望から運んで来たのであったが、

鼈四郎は東京のその伯母の下町の家に落付き、埋葬も終えて、序にこの巨都も見物して京都に帰ろうとする一ヶ月あまりの間に、鼈四郎はもう伯母の擒とりことなっていた。

この伯母は、女学校の割烹教師かつぼうきょうし師上りで、草創時代の女学校とてその他家政に属する課目は何くれとなく教えていた。時代後れとなつて学校を退かされてもこれが却かえつて身過ぎの便りとなり、下町の娘たちを引受けて嫁入り前の躰しつけをする私塾を開いていた。伯母も身うちには薄倖はつこうの女で、良人おとこには早く死に訣わかれ、四人ほどの子供もだんだん欠けて行き、末の子の婚期に入つたほどの娘が一人残つて、塾の雑事を賄まかなつていた。貧血性のおとなしい女で、伯母に叱しかられては使い廻まわされ、塾の生徒の娘たちからは姉さんと呼ばれながら少しばかにされている気味があつた。何かいわれると、おどおどしているような娘だつた。

伯母はむかし幼年で孤児となつた甥の檜垣の主人を引取り少年の頃まで、自分の子供の中に加えて育てたのであつたが、以後檜垣の主人は家を飛出し、外国までも浮浪さまよい歩いて音信不通であつたこの甥に対し、何の愛憎も消え失うせているといつた。しかし、このまま捨置くことなら檜垣の家は後嗣絶あとえることになるといつた。

甥の檜垣の家が宗家で、伯母はその家より出て分家へ嫁に行つたものである。伯母はいつた、自分の家は廃家しても関かまわぬ、しかし檜垣の宗家だけは名目だけでも取留めたい。

そこで相談である。もし「それほど嫌でなかったら——」自分の娘を娶つて呉れて、できた子供の一人を檜垣の家に与え、家の名跡だけで復興させて貰い度い。さすれば自分に取つては宗家への孝行となるし、あなたにしても親友への厚い志となる。「第一、貰つて頂き度い娘は、檜垣に取つてたつた一人の従兄弟女である。これも何かのご縁ではあるまいか。」

始めこの話を伯母から切出されたときに鼈四郎は一笑に附した。あの颯々として芸術三昧に飛揚して没せた親友の、音楽が済み去つたあとで余情だけは残るもののその木地は実は空間であると同じような妙味のある片付き方で終つた。その病友の生涯と死に對し、伯母の提言はあまりに月並な世俗の義理である。どう矧ぎ合わしても病友の生涯の継ぎ伸ばしにはならない。伯母のいう末の娘として自分に取り何の魅力もない。「そんなことをいつたつて——」鼈四郎はひよんな表情をして片手で頭を抱えるだけであつたが、伯母の説得は間がな隙がな弛まなかつた。「あなたも東京で身を立てなさい。東京はいいところですよ」といつて、鼈四郎の才能を鑑檢し、急ぎ蛭雪館はじめ三四の有力な家にも小使い取りの職任を紹介してこの方面でも鼈四郎を引留める錨を結びつけた。伯母は蛭雪館が下町に在つた時分姉娘のお千代を塾で引受けて仕込んだ關係から蛭雪とは昵懇の間柄であつ

た。

何という無抵抗無性格な女であろうか。鼈四郎は伯母の末の娘で檜垣の主人の従姉妹に当るこの逸子という女の、その意味での非凡さにもやがて搦め捕られてしまった。鼈四郎のような生活の些末の事にまで、タイラントの棘が突出している人間に取り、性拔きの薄綿のような女は却って引懸り包まれ易い危険があつたのだつた。鼈四郎の世間に対する不如意の気持から来る八つ当りは、横暴ないい付けとなつて手近かのものへ落ち下る。彼女はいつもびつくりした愁い顔で「はいはい」といい、中腰駈足でその用を足そうと努める。自分の卑屈な役割は一度も顧ることなしに、また次の申付けをおどおどしながら待受けているさまは、鼈四郎には自分が電気を響かせるように軽蔑しながら気持がよいようになつた。世を詛い剩つて、意地悪く吐出す罵倒や嘲笑の鋒尖を彼女は全身に刺し込まれても、ただ情無く我慢するだけ、苦鳴の声さえ聞取られるのに憶している。肌目がこまかいだけが取得の、無味で冷たく弱々しい哀愁、焦れもできない馬鹿正直さ加減。一方、伯母は薄笑いしながら説得の手を緩めない。鼈四郎としては「何の」と思いながら、逸子が必要な身の廻りのものとなつた。結婚同様の関係を結んでしまった。ずるずるべつたり伯母の望む如く、鼈四郎は、東京居住の人間となり逸子を妻と呼ぶことにしてしま

った。そして檜垣の主人が死ぬ前に讒言うわごとにいった「伯母をおまえにやる。おまえの伯母にしろ」といった言葉が筋書通りになった不思議さを、ときどき想い見るのであった。

京都に一人残っている生みの母親、青年近くまで養ってくれた拓本の老職人のことも心にかからないことはないけれども、鼈四郎の現在ののような境遇には、彼等との関係はもとのからの因縁が深いだけに、それを考えに上すことは苦しかった。この撥ぜ開けた巨都の中で一旗揚げる慾望に燃え盛って来た鼈四郎に取り、親友でこそあれ、他人の伯母さんを伯母さんと呼ぶぐらいの親身さが抜き差しができて責任が軽かった。責任感が軽くて世話をして呉れる老女は便利だった。しかし生きてるうちは好みに殉じ死に向ってはこれを遊戯視して、一切を即興詩のように過したかに見えた檜垣の主人が讒言の無意識でただ一筋、世俗的な糸をこの世に曳き遺しひのこ、それを友だちの自分に絡みつけて行って、しかもその糸が案外、生あたたかく意味あり気なのを考えるのは嫌だった。

伯母が世話をして呉れた下町の三四の有力な家の中で、鼈四郎は蛭雪館の主人に一ばん深く取入ってしまった。

蛭雪館の主人は、江戸っ子漢学者で、少壮の頃は、当時の新思想家に違いなかった。講演や文章でかなり鳴ならした。油布の支那服なぞ着て、大陸政策の会合なぞへも出た。彼の説

は時代遅れとなり妻の変死も原因して彼は公的のものと一切關係を断ち、売れそうな漢字辞典や、受験本を書いて独力で出版販売した。当ったその金で彼は家作や地所を買入れ、その他にも貨殖の道を講じた。彼は小富豪になった。

彼は鰥やもめで暮やもめしていた。姉のお千代に塾をひかしてから主婦の役をさせ、妹のお絹は寵ちよう愛あい物ぶつにしていた。螢雪の性癖も手伝い、この学商の家庭には檜垣の伯母のようなもの

以外出入りの人物は極めて少かつた。新来とはいえ螢雪に取つて鼈べつしやう四郎は手に負えない清新な怪物であつた。琴棋書画等趣味の事にかけては大概のこの話相手になれると同時に、その話振りは思わず熱意をもつて螢雪を乗り出させるほど、話の局所局所に、逆説的な弾機を仕掛けて、相手の気分にはバウンドをつけた。中でも食味については鼈四郎は、実際に食品を作つて彼の造詣ぞうけいを証拠立てた。偏屈人に対しては妙に心理洞察の坎のある彼は、食道楽であるこの中老紳士の舌を、その方面から暗そらんじてしまつて、嗜慾しよよくをピアノの鍵板けんばんのように操つた。鰥暮やもめして暇のある螢雪は身体の中で脂肪が燃えでもするようになつた。フウフウ息を吐きながら、一日中炎天の下に旅行用のヘルメットを冠かぶつて植木鉢の植木を剪り噴きさいんだり、飼ものに凝つたり、猟奇的な蒐集しゆうしゆうぶつ物に浮身を俏やつしたりした。時には自分になまじい物質的な利得ばかりを与えながら昔日の尊敬を忘れ去り、学商呼ばわりす

る世情を、氣狂いのようになつて悲憤慷慨ひふんこうがいすることもある。そんな不平の反動も混つて
蛭雪の喰たべものへの執し方が激しくなつた。

蛭雪が姉娘のお千代を世帯染しよたいじみた主婦役にいたためつけながら、妹のお絹に当世の服装みなり
の贅ぜいを尽させ、芝の高台のフランススカトリックの女学校へ通わせてほくほくしているのも、
性質からしてお絹の方が気に入つてゐるには違ひないが、やはり、物事を極端に偏らせる彼
の凝り性の性癖から来るものらしかった。彼は鼈四郎が来るまえから鼈すっぽんの料理に凝り出し
ていたのだが、鼈すっぽん鍋はどうかやうできたが、鼈蒸むし焼は遣り損じてばかりいるほどの手
並だつた。鼈四郎は白木綿で包んだ鼈を生埋めにする熱灰を拵こしらへる薪の選み方、熱灰の加
減、蒸し焼き上る時間など、慣れた調子で苦もなくしてみせ、蛭雪は出来上つたものを雀むし
つて生醬油きじょうゆで食べると近来にない美味であつた。それまで鼈四郎は京都で呼び付けられ
ていた与四郎の名を通していたのだつたが、以後、蛭雪は与四郎を相手させることに凝り
出し、手前勝手に鼈四郎と呼名をつけてしまった。娘の姉妹もそれについて呼び慣れてし
まう。独占慾の強い蛭雪は、鼈四郎夫妻に住宅を与え僅わずかに食べられるだけの扶養を与えて
他家への職仕を断らせた。

鼈四郎は、蛭雪館へ足を踏み入れ妹娘のお絹を一目見たときから「おやつ」と思った。

これくらい自分とは縁の遠い世界に住む娘で、そしてまたこれくらい自分の好みに合う娘はなかった。いつも夢見ているあどけない恰好かこうをしていて、そしてかすかに皮肉な苦味を帯びている。青ものの走りが純粹無垢むくでありながら、何か挽もぎ取られた将来の生い立ちを不可解の中に蔵している一つの権威、それにも似た感じがあった。

お絹は人出入稀まれな家庭に入つて来た青年の鼈四郎を珍しがりもせず、ときどきは傍にいても、忘れたかのように、うち捨てて置いたまま、ひとりで夢見たり、遊んだりした。母無くして権高な父の手だけで育つたためか、そのとき中性型で高貴性のある寂しさがにじんだ。鼈四郎が美貌びぼうであることは最初から頓とん着ちやくしないようだった。姉娘のお千代の方が顔を赭あからめたり戸惑う様子を見せた。

鼈四郎は絹に向うと、われならなくに一層肩かたひじ肘を張り、高飛車に出るのをどうしようもない。その心底を見透すもののようにまたそうでもないように、ふだん伏眼勝ちの煙れる瞳ひとみをゆつくり上げて、この娘はまともに青年を瞳み入るのであった。すると鼈四郎は段違いといという感じがして身の卑しさに心が疎すくんだ。

だが、鼈四郎は、蛍雪の相手をする傍ら、姉妹娘に料理法を教えることをいい付かり、お絹の手を取るようにして、仕方を授ける間柄になつて来ると、鼈四郎は心易いものを覚

えた。この娘も料理の業は普通の娘同様、あどけなく手緩かった。それは着物の綻ほころびから不用意に現している白い肌のように愛らしくもあつた。彼は娘の間の抜けたところを悠々と味いながら叱しかりもし罵ののりもできた。お絹はこういうときは負けていず、必ず遣やり返したが、この青年の持つ秀でた技ぎりよう倆りょうには、何か関心を持って来たようだった。鼈四郎は調子づき、自己吹聴がてら彼の芸術論など喋しゃべつた。遠慮は除れた。しかしただそれだけのものであつた。この娘こそ虫が好く虫が好くと思ひながら、鼈四郎は、逸子との変哲へんてつもない家庭生活に思わず月日を過し子供も生れてしまった。もう一人檜垣ひがきの家の後嗣あとつぎに貰はずえる筈はずの子供が生れるのを伯母さんは首を長くして待受けている。

今宵こよひ、霧の夜の、闇やみの深さ、粘りこさにそそられて鼈四郎は珍らしく、自分の過ぎ来た生涯を味い返してみた。死をもつて万事清算がつく絶対のものと思ひ定め、それを落付おちきどころとして、その無からこの生を顧り、須臾しゆゆの生なにほどの事やあると軽く思ひ做なされるころから、また死を眺めやってこれも軽いものに思ひ取る。幼児の体験から出発して、今日までに思想にまで纏まとめ上げたつもりを考え。

しかる上は生きてるうちが花と定めて、できることなら仕度したい三昧ざんまいを続けて暮そうという考えは、だんだんあやしくなつて来た。何一つ自分の思うこととてできたものはない。たつた一つこれだけは漁あさり続けて来たつもりまわの食味すら、それに纏まつわる世俗の諸事情の方が多くて自分を意外の方向へ押流し、使い廻まわす挺てこにでもなつていようような気がする。霰あられが降る。深くも、粘り濃い闇の中に。いくら降つても降り白められない闇を、いつかは降り白められでもするかと、しきりに降り続けている。

夜も更けたかして、あたりの家の物音は静り返り、表通りを通る電車の轟とどろきだけがときどき響く。隣の茶の間で寝付いたらしい妻は、ときどき泣こうとする子供を「おとうさんがおとうさんが」と囁ささやいて乳房で押はて黙らせ、またかすかな寝息を立てている。鼈かめ四郎が家にいる間は、気難しい父を憚はばり、母のいうこの声を聞くと共に、子供は泣きかかっても幼ごころに齒を食い縛り、我慢をする癖を鼈かめ四郎は今宵はじめて憐あわれに思った。没なくなつた父の老僧は、もし子供が不如意を託かこつて「なぜ、こんな世の中に自分を生んだか」と、父を恨むような場合があつたら、「こつちが頼みもしないのに、なぜ生れた。お互いさまだ。」と聞いて聞かせと、母にいい置いたそうだが、今宵考えてみれば、亡父は考え抜いた末の言葉のようにも思える。子供にも彼自身に知られぬ意志がある。

お互いさまでわけが判らぬ中に、父は自分を遺し、自分はこの子を遺している。父のそのいい置きを伝えた母は、また、その実家の罪滅しのためとて、若い身空ですべての慾情を断つたつもりでも、食意地だけは断たれず、嘆きつつもそれを自分の慾情の上に伝えていく。少年の頃、自分がうまいものをよそで饗ばれて帰って話すとき、母は根掘り葉掘り詳しく聞き返し、まるで自分が食べでもしたような満足さで顔を生々とさしたではないか。そして自分が死水を取ってやった唯一の親友の檜垣の主人は、結局その姪を自分に妻あわして、後嗣の胤を取ろうとする仕掛を、死の断末魔の無意識中にあつさり自分に伏せている。こう思つて来ると、世の中に自分一代で片付くものとは一つも無い。自分だけで成せたとするものは一つもない。みな亡父のいうお互いさまで、続かり続け合っている。はじめて気の付くのは、いつぞや京都の春で、二回会ったきりの画家と歌人夫妻のいった言葉だ。「おれたちは、極楽の場塞げを永くするのも済まないと思つて、地獄の席を探しているところだ」と。そうしてみると、せんせいたちもこの断ち切れないお互いのものには、ぞつこん苦勞した連中かな。夫人のいった、まこと、まごころというものも、安道徳のそれではなくて一癖も二癖もある底の深い流れにあるらしいものを指すのか。それは何ぞ。

夜はしんしんと更けて、いよいよ深みまさり、粘り濃く潤う闇。無限の食慾をもって降

る霰あられを、下から食い貪むさぼり食い貪り飽くことを知らない。ひよつと見方を変えれば、永遠に、霰を上から吐きに吐くとも見える。ひつきよう食いつつ吐きつつ食いつつ飽き足るということを知らない闇。こんな逞たくましい食慾を鼈べつしろう四郎はまだ嘗かつて知らなかった。死を食い生を吐くものまたかくの如きか。

闇に身を任せ、われを忘れて見詰めていると闇に艶つやかなものがあった、その潤いと共に、心をしきりに弄なぶられるような気がする。お絹？ はてな。これもまた何かの仕掛かな。

大根のチリ鍋は、とつくに煮詰つて、鍋なべ底そこは潮干の湯に芥あくたが残っているようである。台所へ出てみると、酒屋の小僧が届けたと見え、ビールが数本届いていた。それを座敷へ運んで来て、鼈べつしろう四郎は酒に弱い癖に今夜一夜、霰の夜の闇を眺めて飲み明そうと決心した。この逞しい闇に交際つきあつて行くには、しかし、「とても、大根なぞ食つちやおられん。」

彼は、穩に隣室へ声をかけた。

「逸子、濟まないが、仲通りの伊豆庄を起して、鮫あんこう鰯この肝か、もし皮剥かわはぎの肝が取つてあるようだったら、その肝を貰つて来て呉くれ、先生が欲しいといえばきつと、呉れるから

——
珍しく丁寧に頼んだ。はいはいと寝惚ねぼけ声で答えて、あたふた逸子が出て行く足音を聞

きながら、鼈四郎は焜^{こんろ}に炭を継ぎ足した。傾ける顔に五十燭^{しよく}の球の光が当たるとき、鼈四郎の脛^{まぶた}には今まで見たことの無い露が一粒光った。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986（昭和61）年12月1日初版第1刷発行

底本の親本：「岡本かの子全集 第五巻」冬樹社

1974（昭和49）年12月10日初版第1刷発行

※疑問箇所の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

入力：阿部良子

校正：松永正敏

2004年1月30日作成

2013年10月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

食魔

岡本かの子

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>